

戦後入植の頃

大場 西吉

何年何月だったか、はつきり覚えていないが、組合長が帰ってきたと聞いたので、早速組合長宅を訪ねてお会いするこゝとが出来た。まだ確実な行き先はないが、近いうちに第二の開拓地をめざし、茨城に行くようになる話を聞いた。私は兵隊で手の指を三、四本落として来て、とても鋏も持てない。開拓は無理だと思っていたが、組合長曰く、大丈夫だ、君には行ってもらって是非やって貰いたいことが沢山あるから、是非行ってくれとの有難い言葉だった。

昭和二十一年十一月七日、小さな竹ごおり一個を背負い茨城県内原に行き、日輪宿舎にいる思い出の深い大八洲開拓団員と共同生活をはじめたが、組合長も一緒だから先行きの心配は全然なかった。

間もない十日に五人ばかりで茨城訓練所を後にし、菅生へと着き、初めは突当りに（平松）鈴木旅館という古びた旅館に宿をとった。組合長は後続を連れて来るため、その日のうちにまた内原に戻って行った。その時、千五百円を預かり、すぐ来るから来るまでこれで賄っておくよう言い渡して帰っ

て行った。その日のお昼がいくら待っても出てこない、旅館に聞いたら、お昼は出ないんだとのことなので、さつま芋をふかして貰うよう頼んだ。出して貰ったのは良かったが、昼食代に千八百円かかった。いよいよ心細くなった。本体が早く来てくれることを祈った。明くる日になって組合長が十人近い組合員を連れて到着した。私も安心して飛上がらんばかりに喜んだ。

組合員とその家族から頼んで、持ち金を全部借り受けた。その借金も、落ち着いて何年か経ってから利息をつけて返済して貰った。

年の末頃から人数もだいぶ大勢になったので、全員の半数の人が利根川の堤防工事に日当取りに出て行った。半数の人が流作にテントを張り、そこにいて開墾に励んだ。

そうして田植えをしたが、五年目に珍しく初めて米の収穫を見た。一同で大喚声をあげて喜んだ。

土方に出役した賃金は配給物資を買う資金にした。

二、三回収穫を目前にして大水で流された時には、どこか

の開拓地を探して移転するか等の話も出たが、組合員は一同こぞって行くならどこでも行く、別れ別れになるなら絶対動かないとの結論だった。また、この菅生沼で頑張る決意を固めた。

収穫目前にして大水で三回も流され、秋から皆無の年を過ぎ、二十七年、作った水田から初めて収穫を得た時の組合員の喜びようは想像以上だった。これで一年間食う心配から解放され、肩の荷がどっと降りた感じだった。

最初から組合の人間はこうあるべきと指導されてきた魂が染みついて、個人が困ったことが出来ても部落皆で処理する

開拓五十周年にあたって

記憶を四十年前にタイムスリップする。

全員がテーブルに付き食事がはじまる夕食は、すいとんとサツマイモが二本。昼の弁当は外米で、石油臭く冷めるとポロポロして箸につかまらない。おかずは納豆の味噌練とたくあん。たまに目ざしが二本あるだけ。卵焼きといえ、卵一個を粉で薄めたもの。

だが、このへんの農家の人達も米や麦半々を食べて贅沢はしていなかった。でも子供ながらに白米と生卵が食べたかった。

のが当然のように思ってきた。私も二年前に火災を出し、丸焼になる災害にあったが、ほとんど不自由を感じることもなく過ぎさして貰った。この体制こそ生前の佐藤組合長が育ててきた共同精神の賜物だったんだなあと改めて敬服せざるを得なかった。せめて組合長も現在まで生きていて欲しかったと痛切に思っている。

五、六年前までは私どもがここまでなるとは夢にも思わなかった。末ながく私どもの行方を見守っていてくれと願いにも喜びあいたい。

鈴木敏一

そして、学校から帰ると牛の放牧と飼料与えが日課であった。

中学三年生の頃、個人経営になった。

昭和三十年に堤防ができて喜んでいたが、三十三年には相変わらず水害に見舞われた。続いてその翌年も利根川堤防の溢流堤が決壊した大災害があった。

明日から稲刈りをすると思っていたら、水が入り、朝起きて見ると一面が湖のようになる。三日から一週間稲が水につき、引くのを待って胸までつかって稲穂を木クキで寝ずに